



おくら乃迄道天



木く乃去う道とふ
冊子不水梨中亦山餘
情亦云子しりんま
了志去山平雪月忘
此亦も心年我しるる
以水部若何様する者



[Blank page with faint bleed-through from the reverse side]

よき流し事おの標産なり
こゝに又真名をよおくこゝのま
かたに軍るまゝなりとぞ我

あゝ永み西申初新

前書略

追く強り玉つる消息尔儀く是れ為小せき俗の能士なり
をしふ故に清為の條く予暗記をし越ハ詞を
かき録すかい付く一小冊なり送之に予多病
ありて疑論穿鑿全ふこと事と好まぬ只世業乃
いとぬふと師の机前小侍りく更と未是を初少
口授せし程し越つるハ名ある先達れ親しく教ふ
さきししを後とねく先少きく記之しを得り又
多ししをれと書ん予々筆に思ぬ過るれハ控悉し
くと妙道乃識者ふよりく正し玉の意し
○夫蕉翁ハ俳諧の聖なりとのことゆゑしを後を志する

人あり予昔越の金塚尔竹雀とつる好人有り今日此
事務をかこむるも之前竹雀を招く曰汝事務を
おろしめし由きく法中おぼく法を守らざる豈は是
人け道もらんや今ふれして三年佛借をせり世替
他人の許えん程おぼくは佛借たまひ志をりを樂し
一白ありやも子う白をふる亦飲る我門の人を以て
一とて戒むるときは行以極力あれハ文を學ぶと
知りたりもよく聖日る紀ハ念獄も回一人として羽衣
きく是れ世もたより生渡きのおぼく追つても有り佛借
を好むもたより一白ありき事務もらん
○佛借れ式ハ甚款小傲とるもたれハ別ハ佛借れ一ま

中尔佛借のそめ教有り白作をせりせんそめ後有り又
甚白の條目ハ一甚此志く穩々もらん馬は別有り
依く一白は扱わく免ともあり一憲ありハ別一
かこ一依て先白作を以へ一え白もく後法格ハ後
多るもれく白化自在もれしてハ法格を聞ても解さ
用ゆる事一授教一むす家あり一他を流すき教人ハ
涼く穿らら正さん事勿漏有り今日世業ハいもぬ志と
のへく遊ふ乃業を唯一白きりやも後世おぼりてま白小
過りたりん事をのそめきり依く白他の助もらん
云かりきとそめ帰るあか一先を以て又切字乃
事ハ平法尔自得を一教有り是を記す甚白も

扱白格白代まご扱少く免と我起等十二興子淺
せしを子條く出原をい一と素只九半一ウ一乞を
清中く解之面後了本

一嵐

月日

一抄子

甚々事

○古式百韻ハ表十句表八句ハ後形り歌仙 四十四又十韻
源氏采字易 長歌 短弁 七十二候 二十八篇 及び
後人の略式形り又今本式の俳諧少りふと古式百韻
を私尔称き一と形り

○表小神祇釋教悉々事名所故事故人の名迹懐等
を外亦やく一き扱を忘りふふは遠くは形り是
甚々大り形り道をもるう知未尔退く出原射ハ自然
之一甚面ふくそ尾するう少形り依く此境をよく心
得る先達ハ表小若所古人を由と一例も何り又表

△天

三

斗乃と云ハ北神祇釋教意を常と十句付うちふこ
 也了既小意歌三吟等此時ハ表十句付うちふれハ麻呂
 部云名所を出れ是又十句等少意平水ハ再遍すても
 意を悉りり字し之より八句表ふ少始なり一依り地階
 之裏移り二句ふよ一是所意を出れとも今乃是一
 されとも後句ハ一是れ賞する乃は是れハ完句也忌物
 うちらるるハ眼まこ夫尔從つて一始り時ハ右忌物裏後
 三四句目まで意を悉りりをいれりハ平仙因一はまこ曰
 表尔同字忌意只之を一ははなり

○附方古式

添 後 一 轉 遠 付 二 句 一 意

向 對 面 貌 柏 子 取 成 付

等 句 今 秋 起 格

大換也式結也も千句ハ子句小て一是れ公なり美句ハ美句
 あり一是れ其之依て一白く小句を勢れハ又附乃至も一白く
 形り何の付り付と限りりる也其ありは美る紀古也人ハ
 何を以て白能せ一や安尔公を付一は就きとも表多所乃
 裏も外月花の直折も一舉句等付格ハ此道の法式もれハ是
 を破るハ今日れ換を背みせり一その平句ハ己くり才力を
 取も示るれハ三句付格ハ一明りりるハ及き付句能ま一は
 三句の格を近くも一はと自他の二つを表と意りり自不

自と續くハ佗の白小仕立焼くハ一む進一焼くハ是ハ神
心を通すハ後云ぬりハ依り小依りハ佗の世まりと成依て永く
用(き)事小らハ三白の焼くハ廣く心得の旨なり

赤越をきのふと又

赤白をくあせー

次の白を翌と知れー

きのふと過りハふりーて翌ををかりハ已くハ心此候るハ
いつて過るハきハ小ぬるハきや是を昔くハ公祠の二ツを双
白化するハ於てハ九あやまハ事知らん既ハ十三無(後)白(女)此
一赤ハ平白(女)續くハ一白くハ此焼くハ小仕立より元三白
此焼くハ(女)去婦(女)とりハ一赤ハ(女)あ(女)あ(女)ハ(女)の(女)子(女)尾(女)ま(女)

んがと先の一ツあり

○先達曰都て附白ハ鞠を蹴り如く心得ハ一(女)是(女)一(女)面
白くハ(女)も(女)次(女)の(女)白(女)附(女)く(女)き(女)ハ(女)一(女)度(女)ハ(女)の(女)尾(女)は(女)あり(女)分(女)て(女)急(女)を(女)多
く(女)扱(女)く(女)る(女)白(女)ハ(女)次(女)の(女)付(女)ハ(女)加(女)論(女)三(女)白(女)目(女)と(女)も(女)指(女)合(女)り(女)て(女)若(女)一(女)む(女)之
公言(女)葉(女)の(女)白(女)於(女)て(女)ハ(女)此(女)一(女)つ(女)ハ(女)此(女)一(女)既(女)小(女)紅(女)日(女)擲(女)ふ(女)て(女)時(女)を(女)を
急(女)し(女)れ(女)芽(女)三(女)て(女)留(女)へ(女)の(女)ま(女)を(女)急(女)也

○歳旦 三ツ柳事

是天地人の三ツとわ(女)ざる(女)祭(女)白(女)を

天(女)の(女)對(女)一(女)芽(女)三(女)を(女)人(女)の(女)對(女)を(女)眼(女)を(女)地(女)の(女)わ(女)と(女)る(女)形(女)り(女)これ(女)ハ
女(女)子(女)と(女)れ(女)娘(女)と(女)小(女)於(女)る(女)子(女)更(女)あ(女)る(女)き(女)事(女)あり

奏面の事

○後白服 第三四句 目大やう 是を侍乃 起 承 轉 合

如くとも

起

起ハかこころこもれ小あわて情をねこー一句を首句
して仕立なり

承

承ハうけりなり 節の白をうけく 是小気持小
とハ生くるり云を承てーのを問ハハ十句こよ
と云是なるるれく白を細るをいなり

轉

轉ハこころなり 節の二句小情を遠みん小ハ氣
と小情ー亦此二句小氣を物さも又泥の事
情と云なり 亦附ハ取迎ハぬく

合

合をうけり節三句の情を引移り 只何とぬく 誰く
引合とく 小ハをりあり 是を小ハ遠のきも 人を
四句目をぬくこもなり ぬくもハ大なる 保るの情を誰く

一三句此大意をハわり 是事 節のちまき小
なり

大伴ハ物のことー物まとも 是ハ條目なり 時あり 是後白をりて
色く 亦変化ありー 竹も又 影のぬーと きく

○折端の事

一ト表ー 是始なり 是又ハ 是又ハ 是又ハ 是又ハ 是又ハ
白地をー

○是表の事

是表の事ー 是表の事ー 是表の事ー 是表の事ー 是表の事ー
表と子なるなり

○奉勺仕事

奉の花を後勺小對し奉勺ハ服勺小對するハ服乃勺仕
仲をさ小柄く揚の益小添くゆへハハ勺をむ一を仕終り
それハ移文小公御い何の細さやう仕終る

○服勺身三つりとし事あり家くの秘事 秘説はありて

まらしく形り振を字留身三つて留小多あり及も終り留
らん及たあのかハせうると此と一節ふら終るハ終りなり振ふハ
服勺仕ありま身三つと身三つり初公なりハハ体ハ勺仕
させんッ為ル右仕格をゆめ多うと終りハ勺仕ハ服勺仕
一白よく身三つ小柄小ときハ右の格ハ月ハ不及るハ後ハ勺仕

切字取しきき後勺と着せ付く。奏勺あるくハ

服勺仕方概

○後勺を君と取し服を連取と心得附るふれハハ勺仕
まの事取し

是活流おけり 活流ハ八時帯も遠り
元より今取あり 臣君ハ儀のまを

或席ゆ

さの目もある見をえする奏哉

砂尔身をさるる 友渡の鶴

此飛白三世此世は仕立り親相ともいふんり依る白西ハ走ハ
依るハ場所の是を扱ひ親お小後て友渡の鶴と付たり

○今釋 連秋早下此付とり

何人家をとり

かゝるる子出るハ部一 部一云

友此古山のいさくき 里

第三の部

○第三をててあをとりし事を作せしむるハ

何とるふ葉乃葉葉風伝る

その中右の片^{カタリ}岨小田を括て

葉葉小風伝る 其の中みし

鶴ハ只又文字七文字の下をよやくと後ハ角けてせ
と何なるハ鶴りと鶴りハの字を結と申ハ自然と白
長ケるくさるる故ハ第三少りハ叶あり

○第三を扱一別葉扱一

○第三て扱ハツレハ通ふてさるるハ留るハツレハ

友シツレ反して終り

我輩ハ去集ハ終ルルニ出テ

立出ツキ

立出多クシ

○第三小留ハナリ小通ふふる〜は〜てハあ〜はナリ反シ
小なり

ふ常いと〜静けき折〜

是ナリ小通ふふの字ハ陽ハ通〜ハ子ハあハたハ小留ハも〜
きり又ハの字ハ下ハ小ハの字ハ残ハりハ〜ハ信ハて

をハもハぬハきハく

道ハ去ハの〜

抄の字ハ中ハ七ハ文字ハ未ハあハ盡ハてハ〜ハ留ハるハおハたハのハ〜ハ終ハり

自然と終る〜終り

○第三小〜反事 爰ハ句ハ小裁ハ〜ハ第三ハハハ少〜ハ終ハり
〜ハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハり
苦〜ハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハり
閑ハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハり

の終人の反事 今日ハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハり
終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハり
終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハり
終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハりハ終ハり

△天

九

や門くり我姓をてさるあらん
後務許きくしりあめくはらん

あらん
あらん
あらん

結まとも軽ひのまをよる並うききういせんの上も軽ひ乃
字を入く後まハあるなりたらんハ

人やゆらん ユララン 人やゆらん
水やまらん まさん みやまらん
花やあらん とびん 花やあらん

いほきやくも同じ事なり結まともを伸ル
人やあらん 人やあらん

此やハ軽ひあはれぬおとまも又軽ひのまあくても一句皆
軽ひるれハせん留るなりまらんハ

久しはさうのとけきまはれぬあはれぬ花のまらん
是ハ久きハ走といん枕詞なりまハ風ルあはれくはあまは
を何とくあはれぬハ あはれぬハ 花のらるまハいうまらん
そと奇一首のま皆軽ひなりこれハルラれ及ミラなりあ
花のららんあまの今をとり及ミてらんをあまらん花のららん

○服令下知の詞のとれハ第三あまて留まらん
あまらん

○四夕月あり

穽八や雪ち雲道乃はくぬ時
桶乃氷を湯尔沸くはる
船と舟も漆いく川に浪す
物ふゆふ日尔よをりせあり
そをを四夕月ありをききりんう
又曰月尔日日尔月の付ること
なりぬしと四夕月尔なりぬる
公地お仕立なり

松を只月なるのことおひいふ
前八日を神とせし次八月を
五拍ひり結きとも月乃称美
と述る

月の部

侍宵を月とおむ(うら)あやまりし侍宵月ハ
十四日をこもり月とよハ
代倍の得りとあり

○立候の月をハ十七夜月をりありん
仲心の宵ハ
東海のごやれ中山まけく
とまきとやぬ丹物よ立候の月

○正月月をハ十八夜月をりありん
世の宵ハ
松の戸ふちしあは
陰の進まれと飛侍月といこそ
あはれ

○おきぬ 一 傍の月も十九夜廿月をいふらんといふ後り

六帖寄小

君もこのまじり一 傍の月もいふらんといふ後り

○ふー 傍月より先ハ廿日

續古今恋糸

移る傍一 傍の月もいふらんといふ後り

○月廿九の赤越前白尔天象降お傘を歩らんより古格也
是等仕事一 傍の月もいふらんといふ後り
答の中にも細帯此興を借つて傍の月もいふらんといふ後り

恋も一 傍の月もいふらんといふ後り

さりとて一 傍の月もいふらんといふ後り

け船尔本日らまれと月かえさ

月も一 傍の月もいふらんといふ後り
の白も一 傍の月もいふらんといふ後り

○月尔月並れ月事

附中々苦一 傍の月もいふらんといふ後り
一 傍の月もいふらんといふ後り
つゝ法を破るもいふらん

花の部

○幸崎傳より子書ふ

幸壽子此書を花より繕ふ

けう元と計るなり後ふくくハ亜されハ大津乃
尚白多しハ跡りるハ箱此書并ハ種外と書

花ハ大事ナ物なるをわく濟の松と云ふりも面ふいとハ

てハ傍乳ゆハ此句ハ比良姓花より書續て勝外と云ふ

と此傳文なり加ハハ又哉ハ新美嘆息の字もハ種外と云ハ

是又傍題のさるハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

幸く幸崎傳受ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

伊賀代名張蕉翁此故郷より出たる書おハ箱の筆より種曰

ハ只ハ人の目よりハ幸崎の書ハ花よりハ種外と云ハ
種外ハ花より種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

種外ハ蕉翁曰此借此目よりハ種外と云ハ種外と云ハ

一葉の事ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

賞よりハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

乃種外ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ種外と云ハ

又曰揚花ふあゝけ花ふら〜と〜まら〜と〜りも揚を賞す
 ぶ切所み物〜いさ〜と〜又揚〜りふふ賞す〜もけ〜と
 とけハ揚花ふら〜と〜ふ美白花の産ふ越あさ〜合られ
 異ふふのふ〜と〜花嫁さ〜と〜を歩は是〜と〜は美す
 とれ〜れい〜と〜と〜し得あ〜と〜は美若の花の白ゆは
 多〜ん

○花ふ揚の付の事

ふの白ハ十の九つ揚乃白之是ふ揚と付〜と〜前白花の
 賞〜美を賞〜と〜り行要なり又付の〜と〜は白〜と〜前花
 を飽乃美〜と〜ふ〜と〜の自を〜と〜と〜ふ

揚を〜と〜事〜と〜ハ〜と〜なり

十五奥ふ白格
 白解を出は

○花の白ふ揚の揚 花の白ふ揚〜と〜が〜と〜は何
 まで目〜と〜なり

○ふの白れ白ふ〜と〜を物〜と〜や〜と〜白ゆ
 ハ物〜と〜及〜と〜り

○揚のふハ初花れ心の白〜と〜花十〜と〜は白ゆ
 立〜と〜は白を白ひの花〜と〜は白ゆの〜と〜は白ゆ
 せ〜と〜は香をほ〜と〜は白ひの花〜と〜は白ゆ

得り得りは西の如く香をばくハ是又初の香く首属する也
又白ひの白格白解ハ十三真受白意の是也此香華白中少也
く通す

○遠付

連新四道通ふ付り

くさくさひの障子縹の幽閑さよ

おさひりき 飼。鳥乃 音

此種き引遠く付れやまぬさるるなり

○面貌

葛蒲ぬく目を経るるさるる

馬上尔有るるさるる怪如也

糸白湯着の沼をん尔持く能きなり故に実方りいあり
面貌のとりく俗情尔りひぬりあり

○白ひ付

あつらふるるいさそくふき又入

裏口、隣乃、後見せ尔くる

○柳音

郭公朽木の冨をさるるん

待せきく牛は来る道

前白尔待のををいひ跡く多る加ふ空音をり

○起情

乳痕尔月日化形る買菜

聞きいこま流き灌頂

尔身引合く事情を起く多り

○拍子

土産さく只音ゆく小亭はせう程

今の今また泣き泣き泣き

糸白河の跡りくをゆくはすくく向きくく加ふ自然

と拍子くくく

○對付

あま〜と池乃湯摺れ松小まき

ふれ中ゆく風乃傘

日

鳥の尿乃流れれくさゆ

物影尔まき火又ゆり一仄著尔

昔八影をる〜き吹を親相尔親相少對〜あり

○取成し

一 高れ世小はゆきまじん乃急少きく
降しく中 尔 鉄炮の音
遠きれや叶くき 夜れ乃の程
心をあしぬうこゝに那しあり

○ 轉

一 是を連弁み引籠くとりふ
石ふぬくふ 解里尔かきゆふ
響出しくは雷くゆけ八極の嘆
ふまふそこくみ流小開き取
ち二句異形のおを續きれ八心を流く精しあり
鶯のあしをいろふと指さしあり

小瓶や木しききき年け梅酒
あふ中春れあふ漏寺尔
常ホ梅酒どあしらん人ふま成けり依てねしきと
しあ速懐を清く精しあり

修験の相をせしる温泉舎り
世れさぬ乃鴨あを露れは角も水や
思まかなくも産産しあり
前を鳴る鳴と續きれを付がしゆらみま是非夢と
きとりあかふしあけり依て句中小涼く附込て心精しあり

○ 意

意者の意 公乃意 詞れ意

よみて恋ハ二百より三句のぼる古ハ又句の意は波にてもも
あり然る不一句のぼるゆゑに説きあらふよ一は古に
詞の意のよりてうふ國乃の意をまんす事ハ初句不
とも知る一十ホしとハつ意奇もくはハ那し是
やうしてれきうこし

○詞の意

指あてめあるううと盆乃月

傾珠意踊の中へ放しやり

是詞本めく意の情也

○公乃意

は程のちゆき歩み乳も細り

庭ふ暖すいあるもくりぬり

よみて志とふの意をりか

依て古人の句不恋一句のぼるゆゑにハ是此節句不
あつたをもう又次の句は舟とあつたを意不主
ぬしとくを是舟の裏にありてふ時ホ句の意を
あつたをもうと一句のぼるゆゑにハ是此節句不
ゆもいまんりさねくてハ恋一句のぼるゆゑにハ是此節句不

○故事は舟し

は舟とて聖徳太子は河やうん

△天

△大

船のかまやふ眼を閉ぢる
強く乃解出とるをせ玉ひしそ
然くそ故事あかまれとるを白くやの形く引
詰し付きり

○軍中事

加茂川を履きて越る又月
火場り多くて武士
又一人間候の拵踏まへり
此形流きり次へ何と云とる事候事

○自他心得事

他の事を受くも能く事も
皆指さる自他あり此の
事候事白きり人情中
是非他も候事

破云ハ

有明の燈火さく事候事
瘦子り泣く盗り事候事
是己の治無く事候事
泣子事候事
と候事

焼火之もむけりかりあけり疲らう肥らういとあき

素春

是三句尔冬のうねをりふ

素秋

是又三句尔月をせりさる

是素春ハ格別素秋ハ変てとていふと也む古格も是ハ
年より一ハ格を表す表せり他の二季は月せしむるハその
月ハ付込ふ秋三句續りてを添へたり此は格乃公
得と凡又素春は白格句解ハ十三真変句著は案の先
并祭句古島の先とす

鳥小鳥

草小草

漢字抄小漢字抄

日尔月

木子木

石取子名所

何と云ふはかり是を近く知る此言かり前句鳥を
為月小扱ひ春ハ次の句多を伴ふきふ至一節句神
みせしむるハ次句ハ悉く用ひて一都く此の句は
作す小抄ハ過か

鳥意通る此句乃は

節を抄りては

是節句ハ凡を神と凡次をを伴とす

手渡りて流の付く、 笠少雨小笠付く、

○四ノ字を續ける付方

右何事と云ふ句格句解ハ十三真及句骨魚の骨、
左何事と云ふ句格句解ハ十三真及句骨魚の骨、
左何事と云ふ句格句解ハ十三真及句骨魚の骨、

○二句立する句格事

向ひてハ流石恨もかゝるゝせ

かゝるゝせハ流石恨もかゝるゝせ

若くを放し、
少き、そ

何れ付くゝ意知れも此身ハ

~~~~~

又曰此語向を二句一意おぼゆると云ふハ

向ひてハ流石恨もかゝるゝせ

又何れハ世をいれ 志まめや

都く二句一意ハ歌の下れ句をゆると云ふハ  
ゆるりてハ平居せと

○二文字句格  
かゝるゝせハ流石恨もかゝるゝせ

かゝるゝせハ流石恨もかゝるゝせ

~~~~~


○二文字の形——とらふを

常白牡丹の字を信じてしるる事

○三字加、運舟の白

花ハキレまんじりくハいざ

花の葉を思ふうけをくはるゝ

是名所かいそは花とくはるゝ白牡丹

○うけの葉を白の事——

ももまの葉の白

あふ秋の白より重 社 乃 葉

かゆいゆをを萩乃うハ風

社の葉かかふと信じてる白牡丹は六つ花の葉を今も
さるる常白牡丹とてあはれあり

去嫌の事ハ諸書おあるとらふも

さ中ふの傳へまは傳はるる

○音小風未越の事——

音のまはれゆをまき無少事及さるる好むはをある白
牡丹ハまきぬとらふまは観了也

○通ふ詞乃事

そくりのそくり
おと ともそり通ふ
は顔ひお越の白子ゆきをひるま

○漢字物ル 氷陽火 少越の得事

氷	コホノ反	コ	コリノ反	キ
陽火	カキノ反	キ	キリノ反	キ
霞	ロロノ反	リ	カシノ反	キ
日雲	スミノ反	ス	コリノ反	キ
霧	リモノ反	リ	キ	キ
	キリノ反	キ		キ

風 カセノ反 ケハ キ

時雨 クレノ反 シケノ反 ケ

雲ハ曇云ニ シケハ時雨ニ

何道よりあやも天地乃事あり夕小よりきき思ふ

○短句小詞續此よーあーり

四三	三四	三四	二又	何道より
二又	三四	又二	四三	是也
初不也	云	小	云	云
いはく	云	人	云	云

此始る川のそりきれくそり相々けきそりかき

